慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | カブールの後半生 |
| Sub Title | |
| Author | 高橋, 誠一郎 |
| Publisher | 三田学会 |
| Publication year | 1910 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.1 (1910. 1) ,p.99- 110 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100115-0099 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全然改革運動の爲めに其精力を傾倒しつゝあるなり。殊に著しきは近頃政府は各方面各階級の論者が主張する改革論を蒐集して二個の浩瀚なる黄書となし之を公けにせり。彼等は又印度を以て一の奴隷帝國なりとなし、印度人(予は彼等が「印度人」なる語を以て何を指示するやを知らず)は毫も政務に參與することを得ずと唱へ、大臣にもモーレー卿の所謂改革なるものは何等の重要なる改善を來すものに非ずと宣言せり。左れど事實は之に反し、印度土人の掌握する半島の行政事務は頗る多く、土民官吏の數は遙かに英人官吏の數を超へ、土民中の有力者は凡ての立法合議機關に其席を有し新計畫の企圖せらるゝに先ちて當然協議を受くるものなり。今やモーレー卿は土民が最高行政府に入ることを許可したるのみならず。彼等に與ふるに歲出歲入の計畫を決定するの權を以てし、更に進んで行政、立法の範圍に付きても頗る廣汎なる部分を彼等の殆んど自由行動に委せり。故に該檄文の起草者が英國の印度統治に關して述べたる所は皆荒唐無稽の謬論にして、苟くも相當の教育を受くるときは十五歲の幼者と雖も、尙之を口にすることを恥づるが如きものなりと云ふも敢て苛酷の言に非ざるなり。此可憐なる民族を保護して、不完全ながら其願望を達せしめ、不充分ながら其利益を擁護するものは英國人を措いて他に之を求む可からざるなり。種族、宗教、階級の相違より生ずる厭ふ可き紛爭の外に超然として唯彼等全般の福利を增進せんが爲めに努力するものは英人を措いて他に之を求む可からざるなり、全力を傾倒して印度全民族の爲めに正義、自由、及び平等の擁護者となり、印度人と回々教徒との爭鬪を防止し、農夫と地主との軋轢を緩和するものは英國人を措いて他に之を求む可からざるなり。然かも該檄文の起草者は之等の簡單明瞭なる事實に付きて何等の觀念をも有せざるものゝ如し。嗚呼濟度し難きは頑迷不靈の徒なるかな (終)



# カヴールの後半生

高橋誠一郎

## (一) ノヴラ(Novara)の戰敗

兵燹僵屍を照して敗陣の夜色轉々悽愴たり。「萬事休せり、吾が名譽も亦」、チヤルス アルベルト(Charles Albert)王は側なるクルザノウスキー(Chrzanowski)に向つて囁けり。火は青き舌を延して王の黒き毛皮と銀の刺繡もて飾られたる外套を嘗めんとするにズランド(Durande)は打ち驚きて王を避けしめんとせり。「無用、余をして死せしめよ、此れぞ余が最後の日なり」。嗚呼今やピエモン(Piedmont)軍はテユリン(Turin)との聯絡を絶たれたるなり、百計既に盡きて最早何等の行動をも取り能ふ可き餘地なし。王はカドルナ(Cadorna)及びコッサト(Cossato)の兩將軍を墺將ラデツキー(Raddetzky)に派して休戰を請はしめたり。墺軍の元帥が此に對して提出したる條件は、ロンバルト軍の兵備を解かしむること、議會の協贊を待つことなくして直にセシア(Sesia)チシノ(Ticino)兩河間の領土及びアレスサンドリヤ(Alessandria)の城壘を平和の締結まで墺軍に引渡すと、並にサボイ公(Duke of Savoy)を人質となすの三なりき。午後九時王は諸將諸侯を召し集めたり。夜は沈々たり、王の悲壯なる音調は四圍の闃寞を破れり。「諸君よ、余は伊太利の獨立の爲めに余自らを犧牲とせり、余は之れが爲に余の生命、余の王子、而して余の王冠をも提供し盡して餘す所なし、余は最早此の苦鬪を續くること能はず、余は今や避く可らざる結果となれる此後の平和に對し余の存在は一大障害たる可きを知るものなり。余は此に調印するを得ず。戰場に於て死に就くと能はざりし余は今吾邦家の爲めに最後の犧牲を供へんとす卽ち余は茲に余が王冠を挂けて而して此を余が王子の爲めに殘すものなり」。時に一八四九年三月廿三日。伊太利建設者の一人なるビットリオ エマヌエル(Vittorio Emmanuele)は實に斯くの如きの時、斯くの如くして王位に卽けるなり。

熱誠溢るゝ雲霞の如き民衆に圍繞せられてア

ベルト王が王宮の殿廊に立ち、三色の旗を打ち振りつゝ、蒼生狂喜の中にフエデリコ スクロピス(Federico Sclopis)の草したる詔勅を述べ終りたる時の多望なる光景は今や夢の如く淡く消え失せてゐる可し」の歌も終に絶えたり、「伊太利自ら

ゼノア(Genoa)の愛國詩人ゴッフエルドヲ マネリー(Gofferdo Maneli)が「嗚呼同胞よ同胞よ、眠を覺せし伊太利は、額に羅馬の甲を着(Fratelli d' Italia, L'Italia s'e desta Dellelmo di Scipio S'e Cinta latesta:)」の歌も此一敗と共に消えて伊太利の名は彼のメッテルニッヒ(Metternich)の謂ひけん如く唯だ一個地理學上の名稱として殘らざるを得ざるに至りしなり。

新王ヴイットリヲ エマヌエレの前途は眞に常夜の闇なりき。立憲政治を布きてより日尚ほ淺くして官民共に未だ之に對して何等の經驗あるなく、議員は徒に叫び徒に狂ひて、此國家多難の秋に處する大決心なく、ノヴラの一敗に國威は全く三色の旗と共にラデッキーが鐵騎に蹂躙し終られ、



敵を前門に控へて然も顧む可き伊太利軍の軍紀は全く弛廢の極に達し、加ふるにこれを支ふ可き國庫は悉く涸渇し盡したり。然れどもエマヌエルは其父の優柔不斷なるに似もやらず果斷猛決、國民が「王と妃と皆獨乙人なり、大事終れり」と慷慨悲歌させる間に、彼は鐵の如き意志、火の如き熱血を以て、暗裡に光明を求め、死中に活を探らんとして努力せり。然りと雖も彼に明晰透徹の頭腦なく、臨機應變の才能なく、衆を醉はしむるに足るの華麗なし、畢竟するに彼は唯だ好個の武夫たるに過ぎず、彼にして其左右に達觀敏腕の宰相を得るなからんか、恐らく彼は赫々たる武名と而して慘憺たる最後とを史籍に殘して伊太利は再び一八四九年の運命を繰り返さゝるを得ざりしなるべし。

(二) カヴール(Cavour)立つ

一八五〇年商務大臣サンタロザ伯(Santarosa)病を以て逝く。彼は其斷末魔に於て臨床の僧に向ひ懺悔を受けんことを乞ひぬ。僧は先づ彼がシッカルヂー(Siccardi)法案を遂行することに努力



したる點につき悔悛すべき旨を說きぬ。然れども彼は死の苦中に於ても尚ほ斷乎として之を拒み贖罪の禮を受けずして瞑目せり。此一事は伊太利民族の長く其勇氣を賞する所なるが、然も彼の死は之よりも更に重大なる事件を伴へり。伊太利建國の偉材カミロ カヴール(Camillo Cavour)が其後任としてピエモンの內閣に入るの機會を得たること是なり。請ふ吾人をして少しく彼の前半生を回想せしめよ。

カヴールはピエモン王統の血を受けたる貴族の一門中に呱々の聲を上げたり(一八一〇年)。彼は其幼時に於て傲岸不遜の資を有したりしが、稍長じてチユリンの兵學校に入るに及び先づ算數の學に頭角を表し、十六歲にして擢でられて築城副官(Sublieutenant in the Engineer)となり、チヤルスアルベルト王が尙ほ未だカリグナノー公(Prince Carignano)たりし時其宮廷に仕へたることもありき。一八三〇年七月に於ける佛國革命の餘燼は伊太利半島をも燒きて劍を撫して立つ志士も多

かりしが彼れ年二十二といふに青春の客氣制せんとして制する能はず、ピエモン政府の因循を痛罵し半島民族の臑甲斐なきを嘆じて縱論橫議往々四隣を驚すこともありしが、何時しか政府の忌憚に觸れて僻寒の地に左遷せられぬ。彼は間もなく職を拋つてヴエルセリ(Vercelli)附近なる采邑に隱れ閑雲野鶴心長閑に耕耘の折々には古今の政策を講究しつゝ靜に時期の到るを待てるものゝ如し。彼は農事改良、陸路水路の開通等に盡瘁し其餘暇を以て好んで國外漫遊を試みたり。英國の政策は素より彼の愛好する所にして殊にサー ロバートピール(Sir Robert Peel)が自由貿易の政略の如きは其最も嘆賞措く能はざりし所のものなりき。

流水の如き日月はカヴールの春を流して十六歲の星霜は瞬く間に移りぬ。記臆すべき一八四八年は將に來らんとす。パイアス九世(Pope Pious IX)一度羅馬に自由を唱へしより革命の火は復も伊太利に燃えたり、マッジニー(Mazzini)は叫び、ガリバルジー(Garibaldi)は切りに狂ひ廻れるも、カヴ

ールは猶ほ平然として籠圍の裡に烟々炬の如き眼を以て天下を窺ひつゝありしが、彼は機の熟せるを見るや知友バルボー(Balbo)ドアゼグリヲ(D'Azeglio)等と共に其主幹の下に雜誌「回天」"Risorzimento"を發行して四九年の危機に際し大勢力を振ひ、一方にはチユリン府を代表して國會議場に現れ熱心にドアゼグリヲの內閣を援けて專ら共和黨と戰ひ、自由王權の主義を標榜して動くことなかりき。

カヴールは今サンタロザの後を襲ふて內閣に入らんとするに當り一條件を附せり。是れ卽ち頑迷固陋の見を持し常に立憲自由の政治に反對せるクリストフヲロー マメリー(Cristoforo Mameli)の免官になり、果然一ヶ月を出でずしてマメリーは其職をピエトル ジヨイヤ(Pietro Gioia)に讓らざるを得ざりき。農商務大臣としてのカヴールが活動の第一着手は殖產興業を奬勵して經濟上に於ける政府の干涉を避け徹頭徹尾自由貿易の主義を採用して以て國民の休養を計るにありき。一八五



一年四月十九日カヴール大藏大臣となり、同年五月には佛蘭西と新協約を締結せり。彼は時流に數歩を先んじたる大達識を以て直接間接國內百般が事務に就き大改善を企てたり。彼は頑冥者流の攻擊を意とせずして公債を發行し、租稅を增徵し、鐵道布設を完成せり。彼は尙ほ他の伊太利諸州がピエモンに對する感情を融和せんとて大度量を以て未だピエモンに於ては市民權をも有せざる中央伊太利の亡命客フアリニー(Luizi Carlo Farini)を擧げて閣僚たらしめたり。

新政府の革命的傾向は固より佛蘭西國中の反動派の喜ぶ所に非ず、況んや伯林及び納維政府に於てをや。一八五一年十二月の Coup d' etat を以て佛國皇帝の位に卽きたるナポレヲン三世(Napoléon III)は其隣邦に等しく反動的傾向あるを希望するの態度を示せり。當時ピエモンの識者間にもナポレヲンの武斷主義に同情を寄するもの少なからず、革命家を以て自ら居る彼のドアゼグリヲ、ベルセジヲ (Bersezio) 及びメナブリア (Menabrea)の如きも行政上多少國民の自由を拘束し、ルイ ナポレヲンの亞流を汲みて新聞紙及び選擧に制限を加ふることに贊せり。然れども獨りエマヌエル王は之を拒けて一八五一年十二月十日の日附を以て倫敦並に巴里なるピエモン公使に內訓を傳へて「王は他國の主權者が見て以て適當なりとなす所のものに向つて敢て干涉を試むることなかるべし、而して王は彼自身に於ても等しく其行動の自由なるべきを希望するものなり」との意を含ましめ明に外國の干涉を排斥するの態度を取れり。此訓令は實にナポレヲンの Coup d' etat の後旬日ならずして發布せられたるものにして王の勇氣と獨立心とを示し得て餘りあるものなり。間もなくカヴールは公然議會に於て舊保守黨を脫するの宣言をなしラタヂー(Rattazzi)ブッファ(Buffa)等と共に "Monarchy, the Constitution, independence, C vil and political progress" を標榜して "Comrubio" なる自由主義の新政黨を組織せり。カヴール今や保守黨と斷てり、首相ドアゼグリヲは



或る點に於ては確に保守主義の人にして其內閣も亦保守主義に傾けるものなり、此に於てかカヴールが大藏大臣としての地位亦動搖なきを得ざるなり。小波瀾は素より數の免れざる所なるべし。

一八五二年四月十五日高等法院長ピネリー(Pinelli)逝く、而して其後任選定に際して總理大臣ドアゼグリヨとカヴールとの間に意見の衝突を見たり。卽ち後者はラッタジーを推し、前者はボンコムパニー(Boncompagni)を擧げたるなり。選擧の結果ラタヂーは五十票に對する七十四票の多數を以て當選せり。ドアゼグリヲ對カヴールの爭議は實に茲に其端を開きたるなり。一夕、ドアゼグリヲ邸に開かれたる晩餐會席上に於て、カヴールは平常主人の嫌惡せるラタジーの上に話頭を向けて彼を揶揄せんと試みたり。宰相は直に澁面作りて顏をそむけつゝ聲荒く「余はラタジーに關し何事をも聞くを欲せざるなり」と叫びたり。カヴールは之に對して何等の答をもなさずして、怒に輝く顏色赤く、突然其席を蹶つて立つよと見えしが

手荒く卓上の皿を床上に拋ちて憤然として室外に出でたり。彼は其手もて頭髮を掻きむしりつゝ後よりこれを制せんとして追ひかけ來りたるラ、マルモラ（Lamarmora）に向つて狂人の如くに絶叫せり「彼は野獸なり、彼は野獸なり」と。カヴールは決然袖を拂つて大藏大臣の椅子を去りぬ。內閣は其最大有力者を失へり、ドアゼグリヲは直に書を捧呈して內閣の更迭を請へり。然れ共王は之を許さず、只だカヴールとファリニーとを除きて他は悉く之を留任せしめたり。斯くしてカヴール對保守黨の對抗を生じ伊太利の政界に於ける慢性の病根とはなれるなり。

カヴールは一時政界より隱退して國外漫遊の途に着き佛英諸國を歷訪して一方には政務と關係を絕つを粧ひ、他方に於ては歐洲中原の政界を視察しつゝ暫く半島の雲行を眺め居たり。然れども半島の政界は氣力なく活氣なきドアゼグリヲをして處理せしむ可く餘りに多事多難なりき。王は此に於てか勢止むを得ず、カヴールを召して新內閣を



達亦遲々として、就中運輸交通業の如きは最も幼稚なる狀態にあり、其機關設備の如きは全く之を缺けり。然れども伊太利は由來貧弱國にあらず、唯だ天與の財寶の空しく鬱るゝものなくして橫はれるのみ、カヴールは此忘られたる富源を開拓せんとせり。觀よ、此方面に於ける彼が施設の如何に活潑々地なりしかを。彼は先づ英佛其他の各邦と最も有利なる條件を以て通商條約を締結し更に自由貿易の主義に基きて關稅改革を行ひ、鐵道を布設延長して有名なるモント セニス（Mont Cenis）堅道の大工事を興せり。彼は次ぎに意を宗教の上に向けたり。洵にマキアベリー（Machiavelli）の謂ひたる如く、伊太利を亡したるものは寺院の勢力なりき。伊太利は常に二種の君主に服從したり、一は俗界の君主にして、一は此俗界の君主よりも更に大俗なる聖界の君主なりき。故に彼は銳意シッカルジー法案を強行して、宗教裁判所を廢し、僧侶の特權を廢して以て公正の法令を布かんとせり。彼は軍事上に於ては彼の普魯亞の



ビスマルク（Bismarck）がモルトケ（Moltke）を得たるが如く、ラマルモラを得て軍隊組織の改造を企圖せり。カヴールは斯くの如き大英斷を以て百方伊太利統一の準備をなせりと雖も、然も彼は最も嚴格に最も忠實に一八四八年の憲法に服從し秋毫も其規定を犯すことをなさゞりき。之れぞ彼が其同時代の大產物ビスマルク公と趣を異にする點にして、終始、英吉利流の代議政體を實現せしめんとして怠らず「實力は法律を破壞す」と謂ふが如き亂暴なる思想は一回も彼の口に上り、頭腦に浮ぶとあらざりき。彼は憲法を棄てず、議會を棄てず。豈にヒエモン國民克く彼を棄てんや。一八五三年の總選擧に於ては彼は優に狂猛なる反動、共和兩黨を制するに足るの地步を得ることゝなれり。彼が終始自由主義の立憲政治家たりしは其性質及び敎育に基く所多きこと勿論なるも然し彼は又之に因て伊太利革新家の人望をピエモンに集め以て統一の業に資せんと欲したるなり。

（三）クリミヤ（Crimea）戰爭

軍紀は振肅し、財政は整備せり。商工業は興り、交通機關は通達せり。カヴールの公正と純潔と熱誠とは終に紛々擾々たる議會をして歸服せしめたり。內政萬端其緒に就きて彼が巨眼は今や其視線を海外に向つて轉ずるの時は來れるなり。彼が宛も善良なる保姆の如くに、匍匐へば立て、立てば歩めと保育したるピエモンは其丹青の効表れて人並に筋骨逞く成長したるなり。此後の彼が義務は此成人したるピエモンを世間に向つて紹介するにあり。孤弱なりと雖も伊太利半島尙ほ一の獨立國を殘して、統一の氣運未だ全く地を拂はざるを列強の間に知らしめざる可らず。彼は此目的を以て最も周到の注意を拂ひつゝ靜に歐洲外交界の中心を望みつゝありき。

一八五四年は實に好個の機會を與へたり。事は暴慢なる露帝ニコラス(Nicholas)二世が「東歐の瀕死人」より其死に先ちて大なる遺贈を受けんとしたるに發したり。英佛は此瀕死の病者を助けて掠奪者を追はんとす。戰爭は破裂せり、英佛兩國は同盟を墺普に對して求めたり。然れども普魯西は反つて露國に對して好意的中立をなし、墺太利は兩交戰國の間に立ち所謂「あちら立てれば、こちらが立たず」底の苦境に陷りて曖昧なる態度の內に荏苒時日を遷延せんとせり。然も眞に露軍を制するの咽喉部はクリミヤ方面よりも寧ろダニユブ(Danube)にあり、同盟軍は如何にもして墺を誘はざる可らず、此に於てか兩國は苦肉の一計を案じ、墺太利の最も嫉視せる一國を導きて同盟軍に加はらしめんとせり。卽ちナポレヲン帝の密便ペルシニーはチユーリンに來つてピエモン王ビットリヲ、エマヌエルに謁し同盟加入を勸告せるなりきカヴールは盲龜が浮木に遇ひたらんが如き心地を以て此の勸告に應じたり。戰後の列國會議、ピエモン全權の出席、伊太利問題の提出、而して露に對する墺の不信、墺に對する英佛の激昂、墺の孤立、次で來る可き時運の趨勢を洞察すればピエモンの前途は希望の光に輝かんとするなり。然れども此希望を實現せしめんが爲めにはカヴールは猶





ほ爲す可きの多くを有したりき。

果して墺太利はチユーリン談判の報に接して驚愕せり。墺太利は愈々窮餘の窮策に出で、更に英佛を說き、新なる議定書を設けて彼の四大保證を基礎に協議を遂げ、而して若し和議を定むることを能はずんば「更に有効なる手段を取るが爲め此に關して協定をなす可き」を約せり。墺太利をして同盟を締結せしめんとする英佛は宛も泥中に鰻を捕へんとして焦るゝものなり。彼等は漸くピエモンの加盟を餌としてこれを得んとせり。然も狡猾なる墺は又も此「更に有効なる手段」云々と云ふ最後の一項を以てヌルリと逃げたり。英佛も玆に至つて漸く墺太利が初めより露西亞を敵として戰ふの意なく、唯だ言を左右に托して同盟軍を瞞着し以て徒に時日を遷延せしむるにあることを知れり。斯くの如くして一時墺太利の提案の爲めに立消えとならんとせるピエモンの同盟加入は墺の悖信と共に復も再燃して、一月二十六日英佛兩強と北伊の一小寒國ピエモンとは玆に同盟條約を訂結せり。此條約はカヴールが最も苦心の跡を印したるものにして、終始外國の援助を仰ぎつゝも尙ほ自國を彼等と同地位に置き毫も其體面を傷けざるカヴールが得意の外交手腕は此時よりして發揮し初めらるゝなり。此條約に依れば、ピエモンは決して英佛二國に應援して露を打つものにあらず、二國と對等の權利の上に立ち、二國と等しく戰場に於ける功過を分つものにして、ピエモンの派遣せる兵員は二萬五千、而して之に要する經費は一時英吉利の支辨に俟つと雖も、此れ竟に貸與を受くるに過ぎずして、不日ピエモン政府は此を英國政府に償還す可きの義務を有するものとすと謂ふにあり。カヴールは此同盟加入に承認を得せしむるが爲めには先づ議會と戰はざるを得ざりき。左黨及び革進黨は伊太利亡命客の聲援を得て切に今般の戰爭を以て非自由的のものとなし、伊太利の採れる在來の方針に反するものなりとなし、若し戰爭に加入すべしとせば寧ろ露を助けて土耳古を討つ可きものなることを主張せり。然れども鳩

鵬の徒には容易に大鳴圖南の壯擧を談る可らず、彼は暫く露國にして今日の戰に勝たんか、其權力は延びて地中海の上に及び、必すやピエモンを脅すに至らんと謂ふ極めて單純なる論鋒を以て此に當り、漸くにして一八五五年二月十日、六十票に對する百一票の多數を以て此條約は代議院を通過せり。されど匿名投票の結果は僅に六十四票に對する九十五票を得たるに過ぎざりき、而して此兩者の差異は暗に反對說を持するもの多かりしと、カヴールが苦慮焦心議院操縱に盡瘁したることを表明するものなり。元老院に於ける投票は贊成五十二反對二十七、蓋し彼等はピエモンが同盟によりて得べき利害得失を打算して此に協贊せるにはあらずして寧ろ國王に對する尊敬心と、政府に對する信任との結果に出でたるものなり。

一八五五年四月ピエモン軍クリミヤに向つて進發す、精兵一萬七千七百六十七人、別に四千四百六十四騎、三十六砲を伴ふ。當初王弟ジェノア(Genoa)公之を統帥するの計畫なりしに、彼は不幸談判中に病を以て逝きしにより陸軍大臣アルフォンソ ラ マルモラ(Alfonso La Marmora)代つて之が司令官たり。カヴールは掌に汗を握りつゝピエモン軍の武者振り如何にと氣遣へり。宣なり彼が手腕に掛けて育て上げたるピエモンは今や世界の活舞臺に立ちて其初役を勤めつゝあるなり。遮莫一八四八、九年の大屈辱とカヴール、ラ、マルモラ等が苦心とはピエモン兵を鍛上げて餘りありき。八月十六日チエルナヤ(Tchernaya)河外の戰に於ける彼等の活動は殊に目醒ましきものありき。消沈したる同盟軍の意氣は此有力なる援助を得て再び鼓舞せられ、土將オメル パシヤがダニューブよりクリミヤに向ふの途次、二月十七日、露軍をウーパロターに要擊して奇功を奏し、更に進んでセバストポール(Sebastopol)に同盟軍を援くるに及んで戰爭熱は英佛の人士を浮かしめたり。英國に於ては平和論者のアベルジーン(Aberdien)骸骨を乞ひ、熱心なる主戰論者パルメルストン(Parmerston)は擧げられて首相の職に任じたり。



ピエモンは今世界に於ける有力なる一陸軍國として認識せらるゝに至りぬ。

親征せんとして親征する能はざる佛帝、益々出でゝ益々其陋を表したる墺太利、陽に虛勢を張りつゝ陰に間諜を放つて自國の體面を損ずることなくして媾和を締結せんと努むる露西亞、斯くの如きの間にセバストポールの運命は次第に傾き行きて九月九日、包圍を受けてより三百五十日初めて陷落するに至りぬ。戰將に終らんとして墺太利は初めて戰ふの決心をなせり。墺太利は愈々一八五五年十二月十六日を以て最後通牒を送り、翌年一月十七日までに其要求を容るゝの回答をなすにあらざれば、墺太利は斷然英佛二强と共に露と砲火を交へんとす。露は彼の屢狼群の襲來を叫ぶ少年の惡戲に慣れたる村民の如く此度も亦墺太利に開戰の眞意なきを信じて之に應ぜず。然れども戰爭中最も好意を表したりし普王フレデリック ウイリヤム(Frederick William)の切なる忠言を容れて一月十六日公然墺に覆牒して其要求に應ず可きを通告せり。平和は將に來らんとす、列國會議は開設せられんとす、而して吾がカヴールが鶴首して待ちたる千歲一遇の好機は最も近き將來に於て現はれんとするなり。

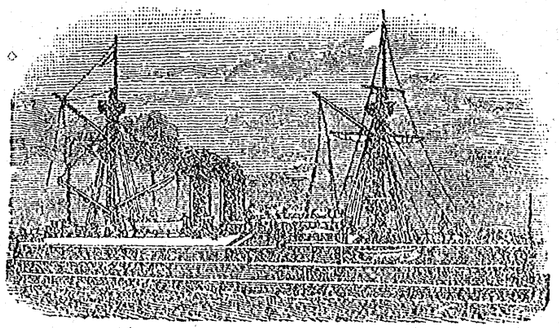
抑も英吉利が列國會議說を提案したるは其意蓋し聯合軍に取りて最も强大なる敵たるクリミヤの嚴冬を和約の協議中に過し、若し談判破裂を見んか直に雪解と共に再び攻擊を開始せんとするに出でたるものなる可しと雖も、一方より之を見れば恰も天が特に伊太利統一の爲めに之を開きたるの觀あるなり。

墺太利は固よりピエモンが此會議に與るを喜ばずと雖も如何せん之を拒むの理由を發見すると能はず。此より先き一八五五年十二月の交、エマヌエル王はカヴール及びマシモ、ド アゼグリヲ(Massimo D' Azezlie)を伴ふて巴里倫敦等西歐外交界の中心を歷訪して他日の基礎を固めたり。卷說傳へて曰く、女皇ビクトリヤ(Victoria)皇婿(Albert)と共に彼等を款待して後、傍人に談つて曰く「ピ

ツトリヲ、エスヌエルは實に好個の武人なり、彼は猛虎とも闘はん」と、女皇は更に此猛虎とも闘ふ可き武人の側に、容姿老狸に似たる一壯漢の侍するありて、常に王を助けつゝあるを見しならん、然れども彼女は恐らく此壯漢が來る可き歐洲の外交壇に如何なる飛躍を試むるやを知ること能はざりしなる可し。

列國會議は一八五六年二月二十五日を以て彌よ佛都巴里に開かれたり。カヴールは心地よきアルプスおろしに送られつゝ意氣揚々としてチユーリンを離れたり。

（未完）





# 前號（第二卷第五號）目次


論說
漢代の非官營論　田中萃一郎
司法權の性質　泉二新熊
上總介忠輝（第三回）　阿部秀助
講演
經濟雜感　添田壽一
時評
布哇に於ける日本勞働者—工場法案と幼年工及び女工—イブセン劇の試演—陪審制度と政友會—學政改革案の解決難—女學生と「可からず訓」—濱野先生の長逝
雜錄
獨逸の政變と財政改革　金嶺生
米國に於ける國家權力伸長の由來　小倉和一
ドルチエスタア事件とオーウエニズム　高橋誠一郎


# 次號（第三卷第二號）豫告


論題未定　福田德三
同　林毅陸
同　堀切善兵衛
上總介忠輝　阿部秀助